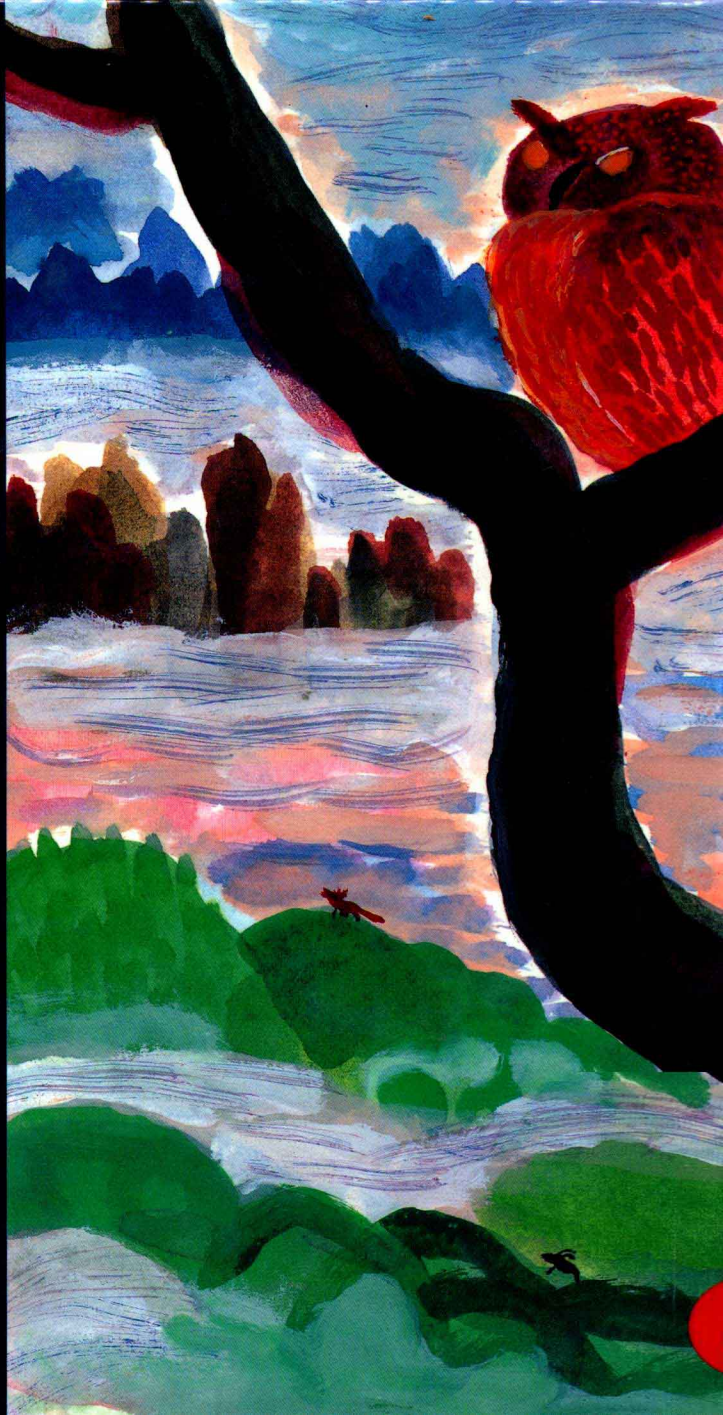


キノリのなががで

木村裕◎作
あへ弘士◎絵



きむらゆういち
作者◎木村裕一

東京都生まれ。造形教室、幼児番組のアイデアブ레인などを経て絵本・童話作家に。「あらしのよるに」で講談社出版文化賞絵本賞、サンケイ児童出版文化賞J R賞受賞。作品に「ごあいさつあそび」「にんげんごっこ」「オオカミのごちそう」「あめあがり」など。

ひろし
画家◎あべ弘士

1948年北海道生まれ。旭川市旭山動物園の飼育係のかたわら、絵本画家として活躍。1996年、退職して絵に専念。「あらしのよるに」で講談社出版文化賞絵本賞、サンケイ児童出版文化賞J R賞受賞。「ゴリラにつき」で小学館児童出版文化賞受賞。



りとりる²⁵

きりのなかで

1999年3月18日 第1刷発行
2000年6月30日 第4刷発行

作／木村裕一 絵／あべ弘士
装幀／坂川栄治(坂川事務所)
発行者／野間佐和子
発行所／株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話(出版部)03・5395・3535 (販売部)03・5395・3625 (製作部)03・5395・3615

印刷所／図書印刷株式会社 製本所／大村製本株式会社
N.D.C.913 48p 20cm

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお、この本についてのお問い合わせは児童図書第一出版部にてお願いいたします。定価はカバーに表示してあります。

[R]〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



©Yūichi Kimura Hiroshi Abe 1999 Printed in Japan ISBN4-06-252875-4 (児一)

キリリのがたて

木村裕◎作
あへ弘士◎絵

講談社



むらさきいろの そらに、はいいろの

くもが ゆっくりと ひろがりはじめた。

しめった かぜが こだちの あいだを、

ひんやりと おりてくる。

おかの うえに つづく いっぽんみちを、

だれかが のぼってきた。





「おや あっちの おかで、
うまそうな ヤギたちが
おひるねしてるでやんすね。
まるで くっつくれと
いわんばかりじゃないっすか。」
そいつは あしを とめると、
がけから みを のりだした。

「どれ、よりみちして、ちょっとはらうしうえでも……。」
と、そこまで つぶやいて、そいつは きゆうに
くびを、プルプルと ふった。

「ああ、おいら、なんてこと いったるんだ。いくら
だいこうぶつでも、もうにとと ヤギは くわないうて
メイと やくそくしたのに。」

じぶんの あたまを ポカポカと たたくと、
そいつは また おかを のほりはじめた。

そいつは バクバクだにに すむ、
ガブと いう オオカミだった。

どうやら メイと いう ヤギと、
そんな やくそくを したらしい。

二ひきは、あらしの よるに、

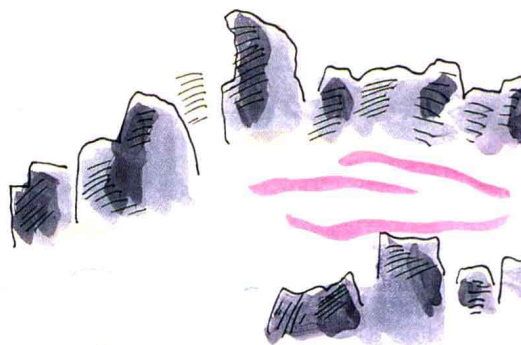
まっくらな こやで であい、

あいてが だれだか わからないまま、

かたりあった。そして とうとう、

ともだちに なってしまったのだ。





「ちえっ、せつかく きょうは

メイとの やくそくの ひなのに。」

おかを みあげて、ガブが

したうちを した。

くろぐろと した いわはだを、

しろい きりが うっすらと

おおいはじめたからだ。

ゆうひに てらされた とおくの

やまやまも、ぼんやりと かすんで

みえる。

そのころ、ヤギのメイも、おかの
はんたいがわの いっぽんみちを
のぼっていた。



「ふう〜。こんなところ、はじめて

きましたよ。ポロポロがおかと いても

いわばかりだし、バクバクだにも

ちかいし、オオカミには きを

つけないとね……。」

そうつぶやいた メイは、はっとして

あしを とめた。

きりに けむる いっぽんみちの むこうから、

だれかが のしのしと ちかづいてきたのだ。

「あれは ガブかな。でも、もし、

ガブじゃなかったら……。あ、とんとん

こっちに くる。どつしやづ。」



しかし、そのころ、ガブは のんきに

いわに こしかけて、メイのことを

かんがえていた。

「でも、うれしいじゃないっすか、

メイの やつ。ヤギのくせに、

オオカミの おいらを

しんじて、こんなところまで

きてくれるんすから。

それも おいらが、

『すこし あぶない

ところで やんすよ。』

って、いったのに、

『だいじょうぶですよ。

わたしは、ガブが

いてくれれば あんしんです。』



なーんて いいやがってさ。

ブフ、ちょっと

ふとってて、すごく

おいしそ……

いや、すごく かわいい

やつなんすよね、あいつ。

ブフブフフ。」

ガブが うれしそうに

わらったときだ。

「おう、ガブじゃないか。

なに わらってるんだ、

こんなところで。」

とつぜん、きりの なかから、

まっくろの おおきな

オオカミが あらわれた。



「うわっ、こ、こ、これは バリーさん。バリーさんこそ、

ど、どうして こんなところに。」

「ヘッヘッヘッ、それがよう。いま、

うまい えものを しとめてな。」

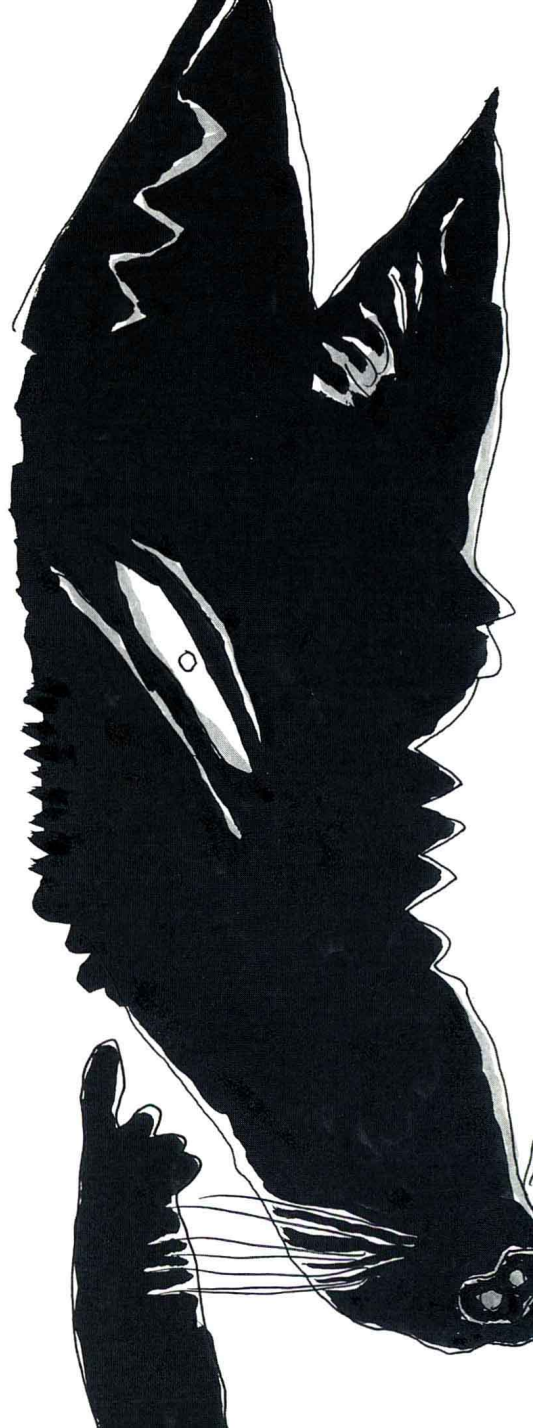
「ええ!? ど、どこで。」

「えーと、この おかの

はんたいがわかな。」

「ど、どんな えもので?」





「ん、そうねえ。しろくて、ちょっと ふとってて、ほら、おまえがいつも だいこうぶつだって いってる にくだよ。」

「えっ、おいらの すきな、しろくて、ちょっと ふとってる にくと いえは……。」

ガブの めの まえが まっくらに なる。

「ああ、な、なんて ひどい。そ、そんな、そんなことって……うう。」
くずれるように ガブは じめんに すわりこんだ。

「おいおい、そんなに がっかりするなよ。

おれが ふとった アヒルを いちわ
くったくらいだよ。」

「えっ!? アヒル?」

「ああ、ヨチヨチ ふとってる アヒルさ。
うまかったぞー。」

ガブが “ふっ” と ためいきを つく。



